



附属図書館では、平成12年度に、電子図書館構想の取組みとしてデジタルコンテンツ研究会を発足させ、貴重資料等を電子化するとともに、解説や翻刻、関連記事などのコンテンツ化を図り、学内だけでなく広く国内外研究者に対する学術研究資料として、また、地域住民への生涯学習、学校教育への教材提供として情報発信を行ってきております。

図書館ホ - ムペ - ジ電子図書館コ - ナ - で順次、公開していますが、その見どころ、訪ねどころを紹介しします。お気軽にデジタル散歩をしていただければ幸いです。

「喫茶去」(きっさこ)とは禅語で「よく来られた、まあお茶でもどうぞ」という意味です。お茶を飲んだら帰れという意味ではありませんので誤解なきようにお願いします。

「句碑めぐり」

- 巡りあう人と歴史と文学 -



【句碑めぐりトップページ】

「はじめに」

この企画は、平成7年8月に附属図書館がホ - ムペ - ジを公開したことにより、何か特色のある情報をWeb上に提供できないかを目的として企画されたものです。

恥ずかしいことですが、松山に、このように多数、句碑や文学碑があることなど当時は予想もしないことでした。『俳句の里松山(松山市役所発行)』の寄贈を受けて、まずは大学近郊から、デジカメ持参で、昼休みや日曜日に出かけました。寺社、公園、学校など様々なところに設置された句碑は、木々の陰や、生い茂った草に埋もれて見つけにくいこともあり、発見した時の喜びは、その苦勞に比例するものでした。その内、形のよい石など見つけると、何か字が彫ってないかと裏側にまわってみたり、まさに「石の裏にも?年」状態に陥りました。当初はそれほどたくさんの句碑を紹介する予定ではなかったのですが、地元新聞に取り上げられ、さらに、TVにまで出演する羽目!になり、「これからもどんどん紹介していきたいです。」などと宣言したために、もう後戻りすることもできなくなり、気がつ

けば、松山市はおろか、川内(現東温市)北条(現松山市)まで足を運ぶことになり、その数は、200基を越え、関連する俳句、短歌など約400を紹介するまでになりました。

Webの面白さは、次々と関連するサイトや項目へとリンクすることにより、現在から昔に自由にタイムトラベルすることが可能となることです。あれも紹介したい、これも掲載したいと、Web意欲?をそそられ、気がつけば、句碑、人物、場所、などをインタ - ネットという赤い糸で結びつけていました。

利用者からは、『「秋山兄弟」の銅像は梅津寺のどのあたりか?』また、香川の高校から『修学旅行で松山に行くので参考にさせて欲しい』など、思わぬ問い合わせに、とまどったり喜んだり、いつのまにか、一つ一つの句碑が我が子のように愛しく思えて来ました。

「句碑めぐり」Web版は、今と昔、人とその思いをつなぎ、俳句はまさに、「ハイテク(インタ - ネット)」と「てくてく足(実際に現地に足を運ぶ)」を駆使した、無尽蔵の心のデ - タベ - スにまで、成長してきました。



【句碑マップ】

「子規」春秋

「春や昔十五万石の城下かな」

「松山や秋より高き天守閣」この春と秋の二つの句はまさに正岡子規の代表作であり、俳都「松山」をこれほど象徴的に詠んでいる句はないと思います。子規は、わずか35年の短い生涯に「俳句革新」という生命を燃焼させました。故郷「松山」を慕い、また誇りに思う彼の心情を偲んでください。



【春の句】



【秋の句】

「山頭火」

「おちついて死ねそうな草枯れる」
「もりもりあがる雲へあゆむ」

自然と一体になり、自己にいつわらず、自由に一筋の道を詠いつづけた彼は混迷する時代に山頭火は、何を見ようとしていたのか？彼は言う。「所詮私の道は私の愚をつらぬくより外にありえない。」彼の終焉の地「一草庵」は、愛媛大学のすぐ近くに今も大切に保存されています。



【一草庵】



「一茶」

「寝ころんで蝶泊らせる外湯哉」
「正風の三尊みたり梅の宿」

小林一茶が二度も松山に来遊したことをご存知ですか？今から210年も前のことです。

なんとその訪ねた相手は近世伊予第一の俳人、栗田樗堂です。彼の住んだ庵は、「庚申庵」とよばれ、平成15年から庚申庵史跡庭園としてNPO法人が管理運営しています。18世紀末の古い庵が、変化する都市のまん中にあるのは驚きです。



【道後公園】



【庚申庵】

「夏目漱石」

「わかる、や 一鳥啼て 雲に入る」
「坊ちゃん」なくして松山は語れません。明治28年松山中学に英語教師として赴任した漱石はわずか1年で、熊本第五高等学校に転勤していきます。しかし、滞在した松山時代や子規と過ごした「愚陀仏庵」での約50日は、彼の文人としての方向を決定していくこととなります。



【松山中学跡】

「子規山脈」

子規の弟子、高浜虚子と河東碧梧桐、文友であり子規顕彰にその生涯を捧げた柳原極堂、子規の寄宿舍の監督であった内藤鳴雪、句友、村上霽月など子規を慕い、子規のまわりに集った人々は「子規山脈」と言われております。その山々にこだまする先人の言の葉に、心を開き耳を傾けて、刻まれた碑を訪ねてみてください。

“松山や 時空にひらく 句碑の里”

(文責 松本秀毅 学術情報課専門役)